

討議・幼児の漢字教育をめぐる

出席者(五十音順)

荒川浩和 (東京国立博物館・漆工史)

石井 勲 (大東文化大学幼少教育研究所長)

市原豊太 (独協大学・仏文学)

小堀杏奴 (随筆家)

小堀桂一郎 (東京大学・比較文学)

鈴木重信 (神奈川県教育センター顧問)

原田統吉 (評論家)

森岡健二 (上智大学・国語学)

山本幹夫 (帝京大学・公衆衛生学)

ジュームス・L・スチュアート(アジア財団日本代表)

(出席者の肩書は昭和53年当時)

は多年小学校の教育に携わりながら、幼児が漢字をどういうふうにして覚えるかを研究され、さらにその成果を幼稚園の児童にも及ぼしてごらんになり、たいへん顕著な効果を持つことを経験なさいました。またそれと同じようなやり方によって、猿にあるフィギュアを見せると、まるで字を読むのと同じように行動ができるというような、そういうこともなさっていらっしゃいます。きょうはそれらのことも含めて、漢字というものが実に不思議なものであるということをお話し下さると思います。それではお願い致します。

市原: それではこれから石井勲さんのお話を伺いたいと存じます。

「幼児の漢字教育をめぐる」という題でございます。石井さん